

■対象は「75歳以上」 山歩きツアー お年寄りたちに「希望を伝えたい」

伊那市の登山ガイド・武村美一さん〈山と人と信州と〉 2025/07/25



北アルプス乗鞍岳の大黒岳でお年寄りたちを案内する登山ガイドの武村美一さん(右)=7月10日午前9時27分



大黒岳の山頂でお年寄りたちに語りかける武村美一さん(右)=7月10日午前8時51分

年齢を重ねても山歩きを楽しんでほしい—。そんな思いが込められた、75歳以上の
お年寄りを対象にしたツアーが開催されている。伊那市富県（注：原文誤り、伊那市富県は存在しない。伊那市と富県は別府県である）の登山ガイド・武村美一
さん(67)はツアーの案内役を務めている一人。30年余にわたるガイド経験の中で、
62歳で白血病を患い、2年前には両膝に人工関節を入れた体験も踏まえて、1年で

も長く山を楽しみたいと願うお年寄りたちを支えている。

■年齢制限 減るお年寄りの受け皿

7月10日午前7時過ぎ、関西地方からのツアー客がジャンボタクシーで北アルプス乗鞍岳を訪れ、標高約2700メートルの畳平に降り立った。参加した7人はいずれも75歳以上で、最高齢は兵庫県明石市の94歳の女性。道路脇の斜面で見頃を迎えたコマクサの花を楽しみながら、ゆっくりとしたペースで大黒岳(2772メートル)を目指した。

武村さんは高山植物の説明をしながら登山道を進む。芽を出したばかりのコマクサを指さして、「なかなか見られないのに今年は数が多いね」。今夏はコマクサの当たり年とも言われ、周囲には数多くの花が咲いていた。

このツアーを企画した会社(兵庫県西宮市)の社長・堀祐希さん(49)によると、「75歳以上」を銘打ったツアーを始めたのは2年前。今回で6回目になる。山のツアーでは参加年齢を70歳や75歳までとする会社が多く、これを超えた人たちの受け皿が減っている。そこで、体に負担をかけずに高山植物などを楽しめるコースを設定し、75歳以上のお年寄りを案内することにしたという。初めて参加する人には六甲山(兵庫県)のお試しコースを歩いてもらい、事前に体力の確認もしている。

今回の参加者の中にも、「70歳や75歳の年齢制限で参加できないツアーが増える中で、この会社のツアーを利用するようになった」と話す人がいた。

■ガイドの役目 楽しみを提供

この日の大黒岳では、堀さんが94歳の女性らをサポートしながら、武村さんは楽しそうに説明を続ける。「この先でライチョウに予約を入れてありますから、楽しみにしてください」。こう語っては笑いを誘う。「槍ヶ岳に登るツアーなら、山がお客さんを喜ばせてくれます。今回のようなツアーでは私たちが楽しみを提供することが大切なのです」と武村さんは話す。

山頂の休憩所でお茶を楽しんだ後、ゆっくりと北へ下る。しばらく歩くと、登山道の上に雌のライチョウが姿を現した。周囲に目をやれば、ハイマツが一面に広がり、霧の晴れ間には雪渓も見える。参加したお年寄りたちは3000メートル級の高山にいたことを実感。94歳の女性は「幸せのてっぺんにいるみたいです」と喜びを語った。

■62歳で白血病に 自分を見つめる

武村さんが、お年寄りたちのガイドに力を注ぐのは自らの経験も影響している。

62歳の時、北アルプスをガイド中に左肩からみぞおちにかけて猛烈な痛みに襲われた。何とかガイドの役目を果たして、かかりつけ医を受診すると「血液の病気だと思われる」との指摘を受ける。総合病院で検査を受けた結果、慢性骨髄性白血病と診断された。

病気での長期入院は初めての経験だった。治療を受けながら病気と向き合う時間は、自分自身を見つめる時間にもなった。振り返ると、医師から病名を知らされた時も、

淡々と受け止めることができる自分がいた。どうして冷静でいられたのか。10歳ほど年下の友人からは次ように言われたという。「武村さんはこれまで人生のレールを敷いたことがないでしょう。レール上を歩いている人は予期せぬことに直面した時、どうしようと思ってしまうのです」。日ごろはなかなか気づけない自分の姿を知るきっかけにもなったという。

24時間の点滴を受けるなどして体調は徐々に回復し、1カ月半後にはガイドの仕事に復帰できた。

■両膝に人工関節 回復の喜び

もう一つの試練は膝の故障だった。17歳の時に右足を骨折した影響もあり、両膝には常に負担がかかっていた。52歳で大学病院を受診した際には「70代の膝になっている」と告げられた。「これまでのような山のガイドはもうできない」との思いから、人生の転換期とも感じた。リハビリテーションの病院に3カ月入院し、傷んだ膝が少しでも回復するように努めた。

しかし、2022年9月、宿泊先の階段で左膝に激痛が走る。受診先では「膝を使い切りましたね」と言われた。そして23年7月、両膝に人工関節を入れる手術を受ける。この結果、膝の機能は回復に向かっていった。

武村さんは、中央アルプス地区山岳遭難防止対策協会・救助隊の副隊長を務めているものの、2年ほどは現場に出られないでいた。手術後の膝の回復を受けて今年1月3日、救助隊のパトロールとして千畳敷の八丁坂をアイゼンを着けて歩いてみた。登りも下りも痛みを感じずに踏ん張ることができた時、「誇らしくて、うれしくてしかたなかった」と話す。

■限界を伸ばす手伝い 「希望」を伝えたい

白血病と人工関節の手術を経験したことで、ガイドとしての武村さんに変化をもたらした。「これまでの山のガイドではお客さんに『感動』を届けてきたけれど、これからは『希望』を伝えたい」。そうした思いが、75歳以上のお年寄りを支えるツアーにつながっているという。

長くガイドをしているお客の中には膝に人工関節を入れた70代女性もいる。その人からは「人工関節を入れた武村さんの歩き方が、以前より良くなっていく様子が私の励みになる」と言われた。

これまでの登山を振り返ると、中学校3年の夏休みに同級生5人で登った南アルプス仙丈ヶ岳が思い出深い。その時に味わった「非日常と、わくわく感」が忘れられない。その後の登山やガイドでも、いつもわくわく感を求め続けてきたといい、その感覚をお年寄りたちにも味わってほしいと話す。「誰にでも体に限界はくるけれど、それを少しでも延ばす手助けをしたい。30余年のガイド人生で、今が一番いい仕事をしているように感じます」